

### <論文>借景の文学：『二百十日』

米田，利昭

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

1990-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019593>

# 借景の文学——『二百十日』——

米田利昭

## 一 八かあんかあんVから八華族や金持Vへ——圭さん

『二百十日』については周知のように、「テーマが未熟で平凡」だから「僅かに会話の興味にひかれて読了することができていど作品」という低い評価から、独特の風格をもった「何よりも漱石でなければ書けなかった」作品、とくに会話が第一級という高い評価までいろいろあるが、会話がよいという点で共通しているようだ。わたしには冒頭近く響きわたる鉄の音が印象的だ。

初秋の阿蘇山麓。夕暮れの澄んだ空気を、鍛冶屋の打つ鉄の響きが「かあんかあん」と渡ってゆく。

「東京の真中でも出る事は出るが、感じが違うよ。こう云う山の中の鍛冶屋は第一、音から違う。それ、此所まで聞えるぜ」

初秋の日脚は、うそ寒く、遠い国の方へ傾いて、淋しい山里の空気が、心細い夕暮れを促がすなかに、かあんかあんと鉄を打つ音がする。

「聞えるだろう」と圭さんが云う。

「うん」と碌さんは答えたぎり黙然もくねんとしている。隣りの部屋で何

だか二人しきりに話をしてい

「そこで、その、相手が竹刀しなを落したんだあね。すると、その、ちよいと、小手を取ったんだあね。」

「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」……」（一）

隣室の竹刀と小手の話し声については亀井秀雄の問題提起があり、それにはあとで触れるとして、ここでは八かあんかあんVが竹刀と小手を導き出したことに触れておきたい。自分たちが話を止めて聞き耳を立てると八かあんかあんVが聞こえ、その後の沈黙を埋めるように隣室の話が聞こえるのであって、二人が話をしている時は八かあんかあんVも竹刀と小手も聞こえず、話を止めることで次々に登場する。これは小説の手法が多くものを同時に活動させられないからであるが、八かあんかあんVが場面を転換させる役目を果たしながら、二人の背後に、近くは竹刀と小手に興じる隣室の客や

遠くは蹄鉄を打つ鍛冶屋という、庶民の存在を示している。

△かあんかあん▽はこの後四度鳴る。竹刀と小手の話は続くが、第二の△かあんかあん▽が鳴ると、圭さんがそれに触発されるように豆腐屋と寒磬寺の昔話を始め、とたんに竹刀と小手は聞こえなくなる。圭さんの回想の大竹藪の奥でつく鉦かねの音は△かかん▽であって、△かあんかあん▽ではない。二つは厳密に区別されている。

「僕は豆腐屋の子だよ」と圭さんが言って一段落すると、向うの椽側で爺さんが髯を抜いていて、(湯治場風の宿屋は部屋部屋が廊下に面して長屋風に並び半ば開放されていた)、二人はこの爺さんを話題にする、と第三の△かあんかあん▽が響き渡る。

するとまた「豆腐屋の音が思い出される」と圭さんの話に戻り、不公平な世の中を公平にしてやろうと小説の主題が顔を見せ、△華族や金持▽あいつらはむやみと人を圧迫するぜ、そんな目にあつたのか、と碌さんが聞き返すと四度目の△かあんかあん▽が鳴る。

相手が気違ちがひならうっちゃっておくより仕方あるまい、という碌さんに、「そんな気違を増長させる位なら、世の中に生れて来ない方がいい」、断呼戦うべしと圭さんは言う。そこへ第五の最後の△かあんかあん▽が響く。

しだいに夕暮れが迫るに合せて、△かあんかあん▽と△かあんかあん▽の間もせばまり、思想も急迫する。

△かあんかあん▽から寺の△かかん▽へ、門前の豆腐屋の子だった圭さんの、△華族や金持▽征伐へ、と連想と会話は進むので、思想的な主題ではあるが、元となった△かあんかあん▽はさびしい、心細い音なのである。

「かあんかあんと鉄を打つ音が静かな村へ響き渡る。癩走った上に何だか心細い。」

人間を寂しがらせるこの△かあんかあん▽は、圭さんの世直しの思想や「あの下女は単純で気に入ったんだもの」(五)という美意識|| 観念とは矛盾する。思想や観念よりもより大きなものに包みこまれて人は生きていることをそれは示している。それは圭さん自身の中にあるというのが平岡敏夫(1)説だ。寺のイメージは死のイメージで、強い圭さんは同時に弱くもある、と。人間がそういう頼りない果敢はかない存在であることも事実だが……。

一方、あの隣室の竹刀と小手について、亀井秀雄(2)は、「さっぱり要領を得ない会話である」「なぜ作者は、作品の主題に関係なさそうなの、こんなナンセンスな会話をわざわざ紛れ込ませるのであるか」と問い、二の浴場の場で碌さんが竹刀と小手のまねをするところを引いて、「碌さんの真似はイロニカルな批評である」という。庶民をイロニカルに批評するだけでなく、同時にそのやりとりが竹刀と小手とも大差のない自分たち知識人のイロニカルな批評ともなっているの意味だろう。中でも圭さんに対してもっともイロニカルである。

「『そら出た。華族や金持ちの出ない日はないね』

「いや、日に何遍云っても云い足りない位、毒々しくって凶迂々々しい者だよ」

「君がかい」

「なあに、華族や金持ちがさ」

「そうかな」(五)

という具合である。碌さんは堂々たる正義派の圭さんをたいがいの場合相対化してしまふ。そのイロニカルな批評は滑稽・余裕小説としての『二百十日』になくてならぬもので、「あんな人間（圭さんのような慷慨家）をかくともっと逼った窮窟なものが出る。又碌さんの様なものをかくともっと軽薄な才子が出る。所が二百十日のはわざと其弊を脱してしかも活動する人間の様に出来てから愉快なのである。」という作者の自賛どおりのものだろう。

今一つ亀井は、対話の中で△言葉の多義性▽が生れる、という。「大切なことは、その無意味な会話のなかで言葉の多義性が生れ、新たな認識に書き手が目覚めて、地の文にそれが操り込まれてゆくことである。」と。『草枕』の△非人情▽がそれだという。が、わたしが思うに、『草枕』の△非人情▽に当る『二百十日』のキイワード△華族や金持▽がそれであった。漱石の対話は、相手の言葉をあいつちを打つように、おうむ返しに繰り返して使うばかりで少しも発展しないように見えながら、じつはその中で、ある言葉を、全く別の意味に生かし直して使っている。△華族や金持▽も、最初は何ということもない碌さんの言葉だった。それが後にはもっぱら圭さんの言葉になる。「新たな認識に書き手が目覚め」たからである。「「えらい者って云うのは、何さ。例えば華族とか金持とか、云うものさ」と碌さんはすぐ様えらい者を説明してしまふ。「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋じゃないか、君」「その豆腐屋連が馬車へ乗ったり、別荘を建てたりして、自分だけの世の中の様な顔をしているから駄目だよ」「だから、そんなのは、本当の豆腐屋にしてしまうのさ」

「こっちがする気でも向がならないやね」

「ならないのをさせるから、世の中が公平になるんだよ」

「公平に出来れば結構だ。大いにやり給え」

「やり給えじゃいけない。君もやらなくっちゃあ。——只、馬車へ乗ったり、別荘を建てたりするだけならいいが、無暗に人を圧逼するぜ、ああ云う豆腐屋は。自分が豆腐屋の癖に」……」（一）

碌さんの△華族とか金持とか▽はえらい者の例として任意に引いた事例だったが、それを圭さんは△華族や金持▽と一括して、特権的な支配階級を指す言葉とした。いっぺんにそうなったのではなく、二の浴場の場ではまだ△華族と金持▽とも言って流動的だったが、やがてこう固定する。差別的な優位の生活をほしのままにするばかりか、平民の精神の自由を圧迫する、自由の敵たる階層の発見だった。言葉が思想を発見したのだ。

やがて漱石は講演「私の個人主義」で、将来特権階級となるべき青年たちに、金力、権力の濫用をいましめ、自己の自由と共に他人の自由を尊重すべきことを説いたが、そういう後の思想にも通ずる、より若くより戦闘的な言葉が△華族や金持▽だった。

何気ない対話の中で相手の使った言葉から、思想の核となる言葉が作られたのである。

『猫』の中で実業家を意味する「活動紙幣」「活動切手」よりも、より直截な言葉だろう。

## 二 △ともかくも鑑鈍▽——碌さん

「二百十日」における碌さんの功績は、△竹刀と小手▽の口真似

をはじめイロニカルな批評をふりまいて、世界の相対化につくした  
こと、「華族とか金持とか」と言い出して圭さんの「華族や金持」  
を引き出したことの他にもまだまだある。前出の「そうかな」(五)  
も、『それから』の書生門野の「そうでしょか」を思い出して思  
わず笑ってしまうのだが——これは漱石がこういう、『三四郎』にお  
ける与次郎のような口軽で剽軽な傍き役を好んだらしいのだが——  
ここでは碌さんが、△ともかくも鱧<sup>どど</sup>を連発して小説に滑稽と余  
裕を与えたことをとりあげよう。

漱石が『二百十日』を書いた明治三十九年は、藤村の『破戒』が  
出て評判になった年で、漱石も一本を買って読み、森田草平に報じ  
て、文章に人工的な余計な細工がなく、真面目にすらすら、すたす  
た書いている、事柄が真面目で、人生に触れている、要するに「通  
人や遊蕩児や所謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居る」と  
大いにほめた。そしてつけ加えて、僕坊っちゃんなるものを書いた  
が、「実は藤村先生とは正反対のものです」といった。正反対とい  
っても、文辞に「餘計な細工」や「装飾沢山」「いたづらな脂粉の  
氣」があるというのでも、事柄が真面目でないというのでもないだ  
ろう。真面目よりも余裕を重んじているということだろう。

これはそのまま『二百十日』にもあてはまる。そしてその余裕の  
半ば以上は碌さんに負うている。この人物については前節に引いた  
虚子あて手紙で漱石自ら、「碌さんはあのうちで色々な変化して居  
る然し根が呑気な人間だから深く変化するのぢやない」といい、  
(だから碌さんの変化に漱石自身の革命への親近を見るなどは誤謬  
だ。)さらに有名な言葉だが、「碌さんは陽気にしてどうでも構はな

いもの。面倒になると降参して仕舞ふので、其降参に愛嬌があるの  
です」ともいう。碌さんの行動そのものが呑気で愛嬌があるという  
わけだ。

わたしは碌さんの言葉にもそんな特徴が表れていると思う。△と  
もかくも鱧<sup>どど</sup>がそれだ。

「ともかくも」は最初は「鱧<sup>どど</sup>」とくっついてはいなかった。そ  
して、圭さんの言葉だった。

「ともかくも六時に起きて……」

「うふん。時に昼は何を食うかな、やっぱり鱧<sup>どど</sup>にして置くか」

(二)

共に圭さんの言葉。この二つを合せるように「阿蘇の山の中に御馳  
走がある筈がないよ。だからこの際、ともかくも鱧<sup>どど</sup>で間に合せて  
置いて……」という。これはまだ普通の言い方だ。が、これを碌さ  
んがとりあげた、

「よさなくっても好い。ともかくも少し飲もう」

「ともかくもか、ハハハハ。君程、ともかくもの好きな男はない  
ね。それで、あしたになると、ともかくも鱧<sup>どど</sup>を食おうと云うん  
だろう。」(三)

ここでもまだ普通だ。が、しきりに使ううち「ともかくも」と「鱧<sup>どど</sup>  
」が離れ難くなる、

「ともかくもあるこう」

「ハハハハともかくもか。君がともかくもと云い出すと、つい釣  
り込まれるよ。さっきもともかくもで、とうとう鱧<sup>どど</sup>を食っちゃま  
った。」(四)

「この様子じゃ、いつ痛くなるかも知れないね。ともかくも、鯰、鯰が祟ったんだから、……」(五)

「ここはどこだって、阿蘇町さ。然もともかくも、鯰、鯰を強いられた三軒置いて隣の馬車宿だあね。……」(五)

「昨日は格別さ。二百十日だもの。その代り僕は鯰、鯰を何遍も喰ってるじゃないか」

「ハハハハ、ともかくも……」(五)

「ともかくも」と「鯰、鯰」が、係り結びのように離れたり、逆さについたり、びったりついて△ともかくも鯰、鯰△という名のうどんがあるかのようだ。

△ともかくも▽は圭さんの口癖で、それが出る度に微笑を誘っていたが、これをうどんと結びつけて△ともかくも鯰、鯰△としたのがうどん嫌いの碌さんなので、ナンセンスな哄笑を呼ぶのだ。

△ともかくも▽は大状況に対する知識人の態度表明を引き出す莊重な言葉の筈なのに、続いて出るのが卑近な庶民の食物△うどん▽だから、おかしいのである。「不条理な観念をよく熟した成句の型の中に挿入すれば、滑稽な言葉が得られる。」(ベルグソン)ということだろうか。あるいは「精神的なものが問題になっているのに、人の肉体的なものの方に我々の注意が転ずるすべての場合、我々は笑いを催す」(同)のだろうか。

この△ともかくも鯰、鯰▽には△言葉の多義性▽もあろうが、まず△イロニカルな批評▽があることはまちがいない。

このほか、宿の下女や馬車宿の雇人の使う肥後訛り、はいの意味のねえが、都会の知識人と地方の庶民との言葉の落差を示して、む

きににならないユーモアを醸し出す。あるいは下女が「御山へ御登りなさいますか」と聞く、

「うん、早く登りたくって、仕方がないんだ」と圭さんが云うと、

「僕は登りたくなくって、仕方がないんだ」と碌さんが打ち壊わした。」(三)

これは『坊っちゃん』で下宿の萩野のおばあさんに、坊っちゃんが「ほんとうのほんまのって僕あ、嫁がもらいたくてしかたがないんだ」という所にそっくりである。

「どれと圭さんはすぐ椽側へ飛び出す。

「いやあ、こいつは熾だ。おい君早く出て見給え。大変だよ」

「大変だ？ 大変じゃや出てみるかな。どれ。——いやあ、こいつは——……」(三)

これも舟の中で、「エへ、大丈夫ですよ。聞いたって」と坊っちゃんを軽く見た野だいこが「皿のような目」を浴びせかけられて、「や、こいつは降参だ」と首をちじめるところに言葉がそっくりである。

「だから鯰、鯰じゃ黙目だと云ったんだ。ああ苦しい。——おい君の顔はどうしたんだ。真黒だ」

「そうか、君のも真黒だ」(四)

は、坊っちゃんと山嵐が喧嘩に巻き込まれて、血だらけ泥だらけになるところを思わせる。

『二百十日』に『坊っちゃん』と共通点が多いのは、同一作家の同年の作である以上当然だが、共に悪を懲らす目的でユーモラスな

盲動をするところが似ている。しかし『二百十日』で革命のためになぜ山に登らねばならぬか、この二つがどうしてストレートに結びつくのか、ちっともわからないうちに圭さんの主張に碌さんが賛成してしまふところこそもっとも滑稽である。

「きつとやるだらうね。いいか」

「きつとやる」

「そこでともかくも阿蘇へ登ろう」

「うん、ともかくも阿蘇へ登るがよからう」

二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空に吐き出している。(五)

最後は△ともかくも阿蘇へ登る▽になっている。ここも漱石自身の説明を聞こう、

「最後の降参も上等な意味に於ての滑稽である。あの降参が如何にも飘逸にして拘泥しない申分以上トボケて居る所が眼目であります。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。あれを不自然と思ふのはあのうちに滑稽の潜んで居る所を認めないで普通の小説の様に正面から見るからである。」(十月九日虚子あて)

漱石は最後をリアリズムと思つて読んじやいけない、滑稽として読んで欲しいといっている。成功か不成功かはともかく、言葉でいうと、△ともかくも鮠▽が△ともかくも阿蘇▽となつたおかしみを笑つてほしいのだ。

亀井のいう「意味と無意味の綱渡りをしてゆく会話文体」のうち「無意味へ逸脱する遊び」が多く、それを樂しめるのが『二百十

日』だといえよう。ひょうたんから駒が出るように△華族とか金持とか▽から△華族や金持▽が出たのは意味だったが、△ともかくも▽から△ともかくも鮠▽が出、△ともかくも阿蘇▽が出たのは無意味だった。

### 三 俳句と小説——漱石

『草枕』もそうだが、『草枕』以上に『二百十日』が熊本時代の漱石の実際の旅行に基づくことはよく知られている。江藤淳は、明治三十二年の「八月末に家を出て、第一高等学校に転任しようとしている山川信次郎といっしょに阿蘇にのぼつた。熊本から内牧まで馬車を利用し、旧登山道路を行くうちに、二人は大薄原で道に迷つた。おりしも二百十日で、荒れた阿蘇山は黒い火山灰をまきちらし、二人は雨の中で難渋した。山はにごつた黒雲の上にそびえ、『黒い夜を遠い国から持つてくる』ような風が、たえ間なく吹きおろしていた。」と、薄と灰と雨と雲と風で、小説『二百十日』に従いつつ当日の様子を描いた。小説を伝記の材料にしたのは、他に材料に乏しかったからではあるが、それが忠実な旅行の記録と思われただからだろう。

当時の資料としては旅行直後の「正岡子規へ送りたる句稿、その三十四、九月五日」がある。まず牧場の句があり、戸下温泉、内牧温泉、阿蘇神社、阿蘇の山中にて……、立野の馬車宿と続くので、實際この通りに進んだものと思う。まず熊本から阿蘇への入口の戸下温泉に一泊した。

戸下温泉

重ねべき単衣も持たず肌寒し  
谷底の湯槽を出るやうそ寒み

これらは二で風呂場を出た圭さんが大きくしゃみをするとところに生かされている。

山里や今宵秋立つ水の音

これは一の「今日山里に立つ秋を」村鍛冶の音が渡る、に生かされる。小説では内牧と見える村が実際は戸下だった。いや戸下と内牧とを合せたのだろう。

内牧温泉

秋雨や蕎麦をゆでたる湯の臭ひ

小説では「餛飩を煮る湯気が障子の破れから、吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思われた。」(四)と、ともかくものうどん屋で雨を予感するが、俳句では蕎麦で、もはや雨となっている。

阿蘇神社

朝寒み白木の宮に詣でけり

これは、「白木の宮に禰宜の鳴らす柏手が、森閑と立つ杉の梢に響いた」(四)とびったり符合する。

阿蘇の山中にて道を失ひ終日あらぬ方にさまよふ 二句

灰に濡れて立つや薄と萩の中

行けど萩行けど薄の原広し

こういう様子は四全体に描かれたが、次の所などに最もよく表わされていよう。

「社会の悪徳を公然道楽にしている奴等はどうしても叩きつけ

なければならん」

「うん」

「君もやれ」

「うん、やる」

圭さんは、のっそりと踵をめぐらした。碌さんは黙然として尾いて行く。空にあるものは、烟りと、雨と、風と雲である。地にあるものは青い薄と、女郎花と、所々にわびしく交る桔梗のみである。二人は榮々として無人の境を行く。

薄の高さは、腰を没する程に延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽うている。身を横にしても、草に触れずに進む訳には行かぬ。触れば雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、白地の浴衣に、白の股引に、足袋と脚絆だけを紺にして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠の様に染まった。腰から上といえども、降る雨に誘われて着く、よなを、一面に浴びたから、殆んど下水へ落ち込んだと同様の始末である。

只さえ、うねり、くねっている路だから、草がなくなっても、何所へどう続いているか見極めのつくものではない。草をかぶれば猶更である。地に残る馬の足跡さえ、漸く見付けた位だから、あとの始末は無論天に任せて、あるいていると云わねばならぬ。最初のうちこそ、立ち登る烟りを正面に見て進んだ路は、いつの間にかやら、折れ曲って、次第に横からよなを受くる様になった。横に眺める噴火口が今度は自然に後ろの方に見えだした時、圭さんはびたりと足を留めた。

「どうも路が違う様だね」

「うん」と碌さんは恨めしい顔をして、同じく立ち留<sup>どま</sup>った。」  
(四)

もう一度俳句を見てみよう。俳句では薄と萩であった。散文では始めは薄と女郎花と所々に桔梗である。俳句は大づかみなつかみ方しか出来なかったが、散文ははじめは小さな花にも目を近める余裕があった。が、たちまちそれどころではなくなる。灰と雨の混じったよなを浴び、下水へ落ちたどぶねずみになって、薄をこいでゆくのだ。草をかぶって道は見分けもつかず、烟りを見て方向に迷ったと思えば泣きべそをかきそうになる状態が、如実に描出されている。

自分、友、道、あたりの状態、どれをとっても現実を超越できない、それが、社会の悪者を退治するという大言壮語とはなはだ滑稽な対照をなしている。

俳句では「灰に濡れて」といい、「行けど萩行けど薄」といっても、現実を超越し、美に遊んでいる。小説に比べれば状況は静止している。小説では時々刻々に状況が変り、状況に応じて心も変る。引用文より少し前では、「眼に余る青草は、風を受けて一度に向うへ靡いて、見るうちに色が変わると思うと、又靡き返して故<sup>もと</sup>の態<sup>さま</sup>に戻る。」とあって圭さんは「痛快だ」と叫ぶ。

このほか漱石の句は、この旅行中でも、  
草山に馬放ちけり秋の空

雪隠の窓から見るや秋の山  
終日や尾の上離れぬ秋の雲

秋の川真白な石を拾ひけり

と、秋の空、山、雲、川を背景に、馬を放ちやる自由、雪隠に囚え

られたおかしさ、やがてスコットランドへ旅して味わうのだが、終日暖かな太陽に照らされて熟柿になったような気分、子供らしい石拾いなどを歌い、のんびりと自然と呼吸を一つにしている。いわば彼の句には別乾坤を建立して自分一人その中へ入ってゆくところがある。

自分ひとり入ってゆくのであって、人々を誘うのではない。

秋の山後ろは大海ならんかし(明二八)

この想像は他人をぎよっとさせる。彼の自然は、時によると思わぬ不気味なものが背後に潜んでいるので、他人とは共有できぬ世界だ。子供の時南画の「懸物の前に独り蹲<sup>くつ</sup>居<sup>ま</sup>って、黙然と時を過すのを楽とした<sup>たのしみ</sup>」少年の心を言葉にしたものが、彼の俳句である。

最近西村好子<sup>(7)</sup>という人が、漱石の助走期を俳句を通して見るといい、その俳句には個の文学も確かにあるが、本質は座の文学であって、「運座的方法」に潜む様々な視線の領略という相対化が「猫という視点を出現させた」という。理屈としてはよく出来ているが、漱石の俳句を見る限りとてもそんなことはいえない。

その俳句の世界は、万人のものにはならない、自分ひとりの思いである。それを何かによって相対化し、客観化しなければならぬ。そのことを知るゆえに、彼はそれをする小説を書いたのではないか。

小説では脱俗、超越は最初から捨てられている。雨が吹き降りに降れば、どこまでもどぶねずみのように歩く、しかもどぶねずみでいいと高く止ってはいられない。「道がちがうようだね」と相棒に相談せねばならず、そこで物見に出てたまたま穴にも落ちるが、そ

のためかえって友情に出会い、穴から外へ出る「天祐」にも恵まれるのだ。

君は美しいことばかり想像しているが、起るのはその反対ばかりで、それが現実というものだ、しかも闘わなければならない、と漱石はこの頃若い弟子の一人に言ったが、現実と闘うために、小説を書かねばならなかったのだらう。

#### 四 〓文明の怪獣〓——漱石（続き）

「文明の革命」を口にする圭さんは、「具体的にどういふ行動を起そうとするのか、そのあたりになるとさだかではない。『圭さん』の背負っている具体的な経歴も明白ではない。」と紅野敏郎<sup>(9)</sup>という。彼は慷慨が先行し、「歴史と肉体を持った十全な人間というかたちで提出されていない」ともいう。似たことは多くの人が知っている。最近ではこの小説を「裏切られた期待」として「夢十夜」と同モチーフと見る石井和夫もそうだ。

この小説に「はぐらかしの滑稽」を見る亀井秀雄は、碌さんは「自分のからかい癖のためにいつも話題を傍路に迷わせてしまい、結局謂は聞かずじまい、しかも圭さんの意志に服さざるをえない」、それも漱石の会話文体のなせるわざだ、という。

これらは『二百十日』に人間、モチーフ、あるいは文体を見て、けっきょく圭さんの閱歴は聞けないから、碌さんと共に読者も裏切られ、はぐらかされ、その点（亀井氏はそうは言っていないが）不十分な作品だとしているようだ。しかしわたしは、これで人間は充分具体的だし、小説の理念は裏切られたり、はぐらかされたりはし

ていない、圭さんの閱歴は語られなかったが、語られたも同然だったと思う。何故なら、圭さんは自分の経歴と、『両都物語』の医者の日記とを同類の、内容も相似のものとして話すと約束しているのだから。

「それから……」

「まだ何か注文があるのかい」

「うん」

「何だい」

「君の経歴を聞かせるか」

……

「その伴の時、寒磬寺の鉦<sup>かね</sup>の音を聞いて、急に金持がにくらしくなった、因縁話しをさ」

「ハハハハそんなに聞きたければ話すよ。その代り剛健党にならずなくちやいけないぜ。君なんざあ、金持の悪党を相手にした事がないから、そんなに呑気なんだ。君はジツキンスの両都物語りと云う本を読んだ事があるか」

「ないよ。伊賀の水月は読んだが、ジツキンスは読まない」

「それだから猶貧民に同情が薄いんだ。——あの本のねしまいの方に、御医者さんの獄中でかいた日記があるがね。悲惨なものだよ」

「へえ、どんなものだい」

「そりや君、仏国の革命の起る前に、貴族が暴威を振って細民を苦しめた事がかいてあるんだが。——それも今夜僕が寐ながら話してやろう」

「うん」

「なあに仏国の革命なんてえのも当然の現象さ、あんなに金持ちや貴族が乱暴をすりゃ、ああなるのは自然の理窟だからね。ほら、あの轟々鳴って吹き出すのと同じ事さ」と圭さんは立ち留まって、黒い烟の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突き抜いて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立ち上がる。……」(四)

小説にしばしば出てくるように圭さんの慷慨は阿蘇の噴煙と一つだが、両都物語Ⅱ二都物語に描かれた仏国の革命もこの噴煙と一つだ。阿蘇の噴煙を媒介に、圭さんの生い立ちと志がフランス革命のエネルギーと通い合う。

だから圭さんの経歴は「聞かずじまい」には相違ないが、「明白でない」とはいえない。それは『二都物語』と一つなのだから、圭さんを知りたければ『二都物語』を読めばよい、となる。いわば『二百十日』は『二都物語』を借景として成立している。

逆にいえば『二都物語』が現代の日本では圭さんとなり、怒れる阿蘇ともなった。

じつはこの『二都物語』は、むろん当時の貴族が、農奴のような領地の百姓や都会の貧民を、どんなに冷酷、残忍、非道に扱ってきたか、を語っている。——狭い石敷の露地を馬車でつっ走らせて、貧民の子供を轢き殺しても、金貨一枚投げ与えればそれでおつりがくるだろうと、ふんぞりかえる貴族。百姓の美しい女房を貸せと強奪し、取り戻しに来たその弟をなぶり殺しにし、それを告発した医

師を逆にパスチーユ監獄に無期徒刑にする貴族。だが、小説は同時に、これに対する人民の復讐がいかに凄惨をきわめ、人道をゆがめたものか、をも語っている。「弱者』による『強者』の糾弾が、時に過剰で醜悪な様相を持つ」こと、「弱者のルサンチマン(うらみ)からくる道徳主義や『正義』感などというものが実は醜いもの(10)だということ」をこそあの小説は力をこめてあばいたのだ。

が、漱石は、この面はとりあげなかった。民衆の復讐の残酷さには目を向けず、もともとのことの起りとなった貴族の横暴、強者の醜さだけを指弾した。そこには日本の現実に立って文明批評を展開する時、この国の支配階級をこそ相手どらねばならぬという漱石の選択眼が働いていた。

「人を圧迫した上に、人に頭を下げさせようとするんだぜ。本来なら向が恐れ入るのが人間だろうじやないか、君」(一)

「奇麗な顔をして、下卑た事ばかりやっている。それも金がない奴だと、自分だけで済むのだが、身分がいいと困る。下卑た根性を社会全体に蔓延させるからね。」(二)

「桀紂と云えば古来から悪人として通り者だが、二十世紀はこの桀紂で充滿しているんだぜ。しかも文明の皮を厚く被ってるから小憎らしい」「彼等の様な愚劣な輩は、人を苦しめるために金銭を使っているし、困った世の中だなあ。」(四)

いずれも碌さんとの対話中の圭さんの言葉だが、身分がいいので金を使える、その権力金力で人を圧迫し、人を苦しめる文明の桀紂。漱石はどうして彼等を相手どることが出来たのか。相手どるようになったのか。

『猫』を書き、『坊っちゃん』を発表し、『草枕』を書き、『二百十日』を書き、『野分』を書いた明治三十九年の漱石書簡を見ると、当時の彼が何を怒ったかがわかる。具体的な問題は少ないが、前半に英語採点委員辞退問題がある。語学試験の面倒はこれを決めた教授方が処理すべきで、労力だけを講師にやれという理屈はない、講師はお客分だから教授以上に丁重に取扱われていい、そうならないのは、大学が御屋敷風、御大名風、御役人風になっているからだ、学長などは「世の中の間人はこんな奴が居って講師でもそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがい」という。防禦的ながら権威に対する徹底抗戦である。年の後半には京都大学招聘辞退問題がある。七月から話があったが十月に狩野亨吉あて二本の手紙でいう、「感じのいゝ愉快の多い所へ行くよりも感じのわるい、愉快の少ない所に居ってあく迄喧嘩をして見たい」。それでなくては「何の為に世の中に生れてゐるかわからない」。世の中という一大修羅場で打死するか、敵を降参させるか、自分の力を試したい。田舎へ行くのは蛇の穴籠りと同じで、くり返すのは厭である、と。これが前の手紙で、後の手紙はもっとはっきりと、自分が卒業して田舎へ行ったのは、世の中は下等で人を馬鹿にしている、汚ない奴が失礼千萬な事をする、だから田舎へ行って美しく生活しよう、だったが、田舎へ行って見ると東京同様の扱いを受ける、彼らは「文明の衣をつけた野蛮人」だ、だったら命がけで勝負すべきだ、彼らの得となる事をするのは、社会の悪徳を増長させることだ、これからは決して退かず、敵を打ち斃す、わが歴史は不愉快な歴史であるが、己の偉大を試す、妻子や親戚もあてにしない、

一人で行く所迄行って斃れる、といった。これは相当に『二百十日』の圭さんと重なるが、まだ敵の姿は具体的でない。

十一月に読売新聞への招聘を断った滝田哲太郎あての手紙に、「ある教師は余がやめればいゝと考へてゐるらしい。余がやめれば、あとから、すぐ運動して這入らうと思ふてゐるものもあるらしい。こんな奴等を増長させては世の為めにならんからやめぬ。生徒は何の考もなく只軽跳こたにして生意気なのである。然しこんな生徒を征伐しないで学校を出ては余は生涯心持ちがわるい。」とあつて、ようやく敵は同輩の教師と生徒と見えてきた。

加計正文あてに、「学校へ行くと高等学校の生徒のアタマを一つ宛ポカ／＼なぐってやり度なる事がある。千駄木のワイ／＼共に大きな石をつけて太田の池へ沈める工夫などを考へる」なども具体的に、敵は学校の生徒と近所の連中だ。若い友人が苦沙弥ならぬ漱石の敵を「落雲館や車夫」と書いてきた手紙もあるようで、『猫』に描かれたような近所や生徒が癩癩の種であつたらしい。大町桂月、正宗白鳥、坂本四方太、河東碧梧桐ら漱石の悪口をいう人間に彼は相当執拗だから、文学上の論敵もこれに加えていい。だが、このように見える敵は例外であつて、多くは見えず、一般的なのである。抽象的な△世の中▽や△世界▽、どこにもある△邪曲▽なのである。これらと戦えと森田草平はじめ周囲の若い人たちに漱石は書いた。僕は君らのおとっさんじゃあない、「矢張り先生にして友達なるものだね」といいながら。「文章もかき上げると愉快だが、かいているうちは苦しいものだ。胃が堅くなる。外の事は何にも考へられなくなる」といいながら。しかも書くことが闘いだつたから、そ

れは止められなかった。

「天下の犬を退治れば胃病は全快する。是が僕の生涯の事業である。外に願も何もない。況んや教授をや況んや博士をや」(六月十二日、加計正文あて)

敵は同僚、生徒、近所、文壇くらいにすぎなかった。いわば世間の名声——教授と博士——だった。それを小説では△華族や金持▽とし、さらに△文明の怪獣▽としたのは、亀井のいうように、小説を書くことそのことが、これをもたらしただけではないか。

さいごに翌日、もう熊本へ帰ると言い出した碌さんを圭さんが説得するところで△文明の怪獣▽が出てくる。

「例えば今日わるい事をするぜ。それが成功しない」

「成功しないのは当り前だ」

「すると、同じ様なわるい事を明日やる。それでも成功しない。すると、明後日<sup>あさって</sup>になって、又同じ事をやる。成功するまでは毎日々々同じ事をやる。三百六十五日でも七百五十日でも、わるい事を同じ様に重ねて行く。重ねてさえ行けば、わるい事が、ひっくり返って、いい事になると思ってる。言語道断だ」

「言語道断だ」

「そんなものを成功させたら、社会はめちやくちやだ。おいそうだろう」

「社会はめちやくちやだ」

「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の怪獣を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう」

「ある。うん。あるよ」(五)

このあと、△ともかくも阿蘇▽が出てくるので笑ってしまふことは前に述べた。

ここで、悪い事を繰り返しやるうち、悪い事が良い事になる、というのは、現在の日本の支配階級のやり口にそっくりである。大型間接税は導入しません、と公約しながら、売上税を導入しようとし、それがダメになると、消費税と名を変え、天皇危篤のどさくさにまぎれ強行採決する、そうしてしまえば、大企業に大減税をしそのぶん庶民からとり立てる、共同謀議の臭いのするこの税も錦の御旗になる、そんな現代を漱石は見通していたのだろう。

教授になれぬ、博士になれぬ、学校も家庭も近所も親戚も不愉快な漱石のルサンチマンを、△華族や金持▽という△文明の怪獣▽を倒すという文明批評へせり上げた、小説を書くことが彼にそれをさせた、そこに当時の漱石がいた、と思われる。

(小説本文の引用は新潮文庫版による。)

注

- (1) 平岡敏夫『漱石序説』(昭和五一年 塙書房)
- (2) 亀井秀雄「漱石の文体」(『一冊の講座夏目漱石』昭和五七年 有精堂)
- (3) 明治三十九年十月九日高浜清あて書簡。
- (4) 明治三十九年四月一日森田米松あて書簡。

- (5) 江藤淳『漱石とその時代 第二部』(昭和四五年、新潮社)
- (6) 漱石「思ひ出す事など 二十四」(明治四四年)
- (7) 西村好子「漱石の俳句的世界——作家漱石に至るまで」  
〔『日本近代文学39集』昭和六三年一〇月〕
- (8) 明治三九年十月二十六日鈴木三重吉あて書簡。
- (9) 紅野敏郎「新潮文庫『二百十日・野分』解説」(昭和五一年)
- (10) 見田宗介の言葉、「論壇時評」『朝日』